

天国とはどういうところかと聞かれた時、皆様はどのように答えますでしょうか。神様がいらっしゃるところだけれども、天国にはまだ行ったことがないからわからない、そもそも自分が天国に行けるのだろうかとお考えになる方が多いのではないかと思います。イエス様がいらっしゃる天国、神様の国である天国、イエス様は私たちに天国についてどのように語られたのでしょうか。

聖書の中で天国とは、神様がおられるところ、神様の支配が行き渡っているところを天国と呼んでいます。従って、それは空の上にあるとか、地面の下にあるとか、太平洋の海の真ん中にあるとか、そのようなことではなく、神様の支配がおよんでいるところ全体を天国と呼んでいるのです。主の祈りの中でわたしたちは「み国がきますように」と祈りますが、これは私たちが住む世界に、神様の支配が行き渡り、この世界が天国になるようにとの祈りなのです。

イエス様は天国について、私たちにどのように語られたのでしょうか。それは、本日の福音書にありましたように、たとえ話を用いて天国、神の国について語られたのです。たとえ話とは、私たちがよく知っている存在を用いて神の国に関わることを示すのがたとえ話です。マルコによる福音書の直接の読者であるガリラヤの人々は、皆貧しく、教育を受けたこともなく、自分自身で字を読むことも出来なかった人々が多くいました。ガリラヤは農業がさかんです。現在も農業がさかんに行われています。そこでイエス様は、種まきや作物が育つ様子、収穫の様子を用いて、神の国について語られました。農業に関するたとえ話が多いのはそのためです。

本日の福音書に記されていたたとえ話から、天国について本日は二つのことを学んでいきましょう。

第一は、天国は人間が目で見えて増え広がったり、成長を実感できる存在ではないが、確実に成長し、この世界を包み込んでいくのであると語っています。作物の成長は人の目で確認できることではないけれども、確実に成長に実をもたらす、天国も同様に、人間の思いや都合、人間の理解のおよぶ範囲で成長するのではないけれども、確実に成長に、この世界に広がっていくのであると語っているのです。わたしたちが自分の尺度で、神の国がなかなか訪れない、増え広がっていかない、この世界の悪の力に天国は勝てないのではないかなどと判

断してはならないと言っているのです。

そして実が熟すと鎌を入れるという言葉が出てきます。これは神様が人間の人生の実を判断なさる、それによって神の国に入れるかどうかが決められるというわけです。これを聖書の中では最後の審判と呼んでいます。神様は悪をお赦しにならない、私たちは天国に入れないのではないかと思われる方が多くおられますが、イエス様はそういう私たちに完全な罪の許しを与えてくださるため、十字架にかかれたのです。私たちはそのことを覚え、日々神様の御心にかなうように生きるのが重要である。

第二に、天国はからし種のようなものであると語られています。たとえわたしたちの世界では小さな存在に見えたとして、事実、現在は小さい存在であったとしても、そのままでは終わらない、この世界で最も大きな存在になると語られているのです。日本においてキリスト教は本当に小さな群れです。伝道教区もそのことからの新しい歩みのために北関東教区において始まったわけです。しかし私たちは今小さいからとあきらめたり悲嘆にくれるのではなく、からし種のようなちからを持った神の国を、私たちが追い求め、人々に証しするのが信仰者としての努めなのです。現在は新型コロナウイルスの影響で教会の活動も大きな制約を受け、私たちはさらなる困難に只中にありますけれども、本日のたとえ話の学びから、新しい希望と未来を見出し、歩み続けていきたいものです。